

次世代子育てに向けた親準備性概念の捉え直し —親準備性の世代間比較を通して—

中村 翔・田原 歩美

福山大学こころの健康相談室紀要 第6号 別刷

2012年3月

次世代子育てに向けた親準備性概念の捉え直し

—親準備性の世代間比較を通して—

中村 翔・田原歩美

福山大学大学院人間科学研究科

キーワード：親準備性，異世代交流，次世代子育て

はじめに

親になってゆくうえで形成する意識の指標として「親準備性」がある。親準備性という概念・用語は、岩田ら（1982）の研究によって初めて用いられた。岩田らは親準備性を、望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期（青年期）における、価値的・心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態を意味するものと定めた。具体的には、望ましい結婚生活と育児行動を成立・維持させるような、異性観、結婚観、性役割観にはじまり、子どもの受け入れに関わる態度（親としてのアイデンティティの準備状態）、健康な子どもを育てる親や育児知識や技能の習得度など、多くの領域から構成されると考えられた。このように定義しているものの、岩田らの学生を対象に親準備性を測定した研究では、異性との交際関係や性交渉、乳幼児期の生育歴程度までしか触れられていない。親準備性についての研究はそれ以後も幾人かの研究者たちによってなされてきており、その都度その定義も少しずつ見直されてきた。近年の岡本・古賀（2004）の研究では親準備性を定義するにあたり、まず、少子化、核家族、地域社会の崩壊などの原因から若い世代が身近に子どもに接する機会が著しく減少し、従来、自然に身につけていた「育児の学習」ができにくい社会状況をその背景要因として捉えている。そして、このような社会の変化により、子どもや子育てに関する具体的な経験をしないままに親になる人たちが増えており、幼児虐待など、子どもや子育てをめぐる事件が増加している背景には、親が子どもや子育てを知らないという問題があると述べている。以上の問題点を踏まえ、岡本・古賀（2004）は親準備性を、子どもに対する親としての役割を遂行するための資質、つまり「養育役割」であり、その内容として「子どものイメージや子どもへの関心」、「母親による子育てへの構え、育児観、性、結婚、夫婦の役割・育児についての意識と態度、性の受容など」「親志向性、母性意識、親への親和性、親への同化」という3点から構成されると定義した。ここまで、親準備性とは母親たちの概念から抽出された養育役割として捉えられてきたが、果たして本当に養育役割のみでいいのだろうか。それでは、これから子を持ち親になってゆく者たちに求められるレディネスとはどんなものであるのか、すなわち「親になること」についてどう考えていくべきだろうか。

本研究では、既存の養育役割に加え、親になるうえで形成すべき大切なレディネスとして以下の3点を挙げる。

第一に、「地域や社会単位で子育てする」こと、我が子のみならず地域の子どもたちに触れ合い、共に育ててゆくという意識である。育児ストレスによる育児放棄や児童虐待といった問題が後を絶たないという現状において、児童相談所の虐待相談処理件数は、1990年度（1,101件）から2000年度（18,804件）にかけて、18倍にも増加している。厚生労働省は実態値を更に35,000件と推定しており、育児放棄や児童虐待の結果、子どもの命が奪われるなど深刻なケースも増えている。また、人口問題研究所によると、子どものいない世帯は1990年（7,309世帯）から2005年（10,861世帯）まで年々増加している。現在は、我が子を持つまで子どもに触れたことがないという親が60%で、ここ20年間で倍増しており、（厚生労働白書、2011）。その結果、コミュニティの崩壊、ギャング集団の消滅も起きている。また、「子育ては大変」という先入観によって、子どもを持ちたくないとする若者も増加していると考えられる。そのことから、スキルが身につかない状態で子育てを行い、育児不安が大きくなる可能性のある若者が多数いると考えられる。こういった若者は、将来次世代を育成する可能性を有する思春期から青年期の若者が、備える必

要のある性的自立に関する学習や母性愛を育む学習を通しての自己受容・自己肯定感の形成が未発達であると言われている（平田，1999）。また，花沢（1992）によると，個人の幼少時における他の乳幼児との接触経験は，対児感情の生成から発達過程にかけての基盤として考えられており，高校生を対象とした，乳幼児との接触体験が対児感情に及ぼす影響を調べた研究では，男女ともに乳幼児との接触体験を多くもった高校生は，愛着的方向での対児感情の高い傾向が認められている。そうして，対児感情の発達は，男女という性的要因よりも，むしろ成育史上の体験から，大きな影響を受けるのではないかという仮説の一端が立証されたと考えることができる。以上のような先行研究から，地域社会の一員である者として，地域社会の子どもに関わることは，自らの子育てに対するレディネスを備えさせてくれるであろうし，そのレディネスの発達こそが次世代へのよりよい子育てへとつながるだろう。そして，ここで忘れてはならないのが，誰しもが子を持つとは限らない社会で，そうした人たちも含めて，また，現在子育てを終えた世代の者であっても，次世代の地域社会を育成していくという姿勢を持つことが望ましいという理念である。

第二に，「性別という概念を越えた子育て」である。従来男性に期待されてきた，働き，家庭を養うという，生き方や生活していくための作動性を含むモデルを子に提示できるよう，男女問わずアンドロジニーな概念の構築に努めるという点である（小野寺・青木・小山，1998）。子育て問題について触れる時，その多くが母親の育児のありかたや責任について問われる。しかし，責任，原因は母親にだけあるのではなく，父親の養護性，父親と子どもとの関係についても考えることが重要なのではないだろうか。以上の，育児放棄に関する問題を，現状では見落とされがちな男性の問題でもあると捉えた研究では，夫の育児参加度の高さは母親の育児不安の軽減につながるということ，家庭内コミュニケーションが夫婦関係の良好さや親ストレスの軽減，さらには子どもの愛着の安定性とも関係していることが明らかになっている（数井，1996）。また欧米でも，夫婦関係の状態が，親の子どもへの関わり方や，子どもの発達・適応状態に影響を与えることが報告されている。夫婦関係の良好さ，愛情的・情緒的なサポートは，日常的なストレスを解消・減少させ，母親としての自尊感情や有能感を高め，子どもの愛着が安定的に発達するという結果も得られている（Belsky，1984）。このように，家庭・子育てにおいて父親の持つ役割は非常に大きいと言え，育児を母親に任せきりという考え方に囚われず，積極的な母親への支援と，父親の育児への協力が求められる。そして，精神医学者の小此木（1994）は，夫婦のケアばかりが重視されてきた母性衛生の分野において，夫たちの精神的ケアにもっと関心を向けるべきであるという声が近年高まってきていると述べている。すなわち，性別の概念を超えた子育てに臨むためには，一方的に男性の育児不参加を嘆くのではなく，まず男性が育児に参加できるような家庭環境をパートナーが整えることも必要なのではないだろうか。

第三に，子育て文化の伝承である。現在はレディネスの未発達により子を持つことに不安を抱く親が多く，少子化も深刻な問題である（厚生労働省）。よりよいレディネスの醸成には，先代の子育て経験者達との交流が，親自身の「育つ力」を引き出す環境要因となり，適切な場面での他者（保育士等）との関わりも大切である（柏木，2010）。

本研究の目的である，既存の親準備性概念の捉え直しにおいて先に述べた三点を踏まえると，幅広い世代からの意見に耳を傾ける必要があるだろう。そこで本研究の調査フィールドとして，「広島県東部における異世代交流型子育て支援」を選定した。その事業の参加者に「親になること」についての質問紙調査を行い，そこで抽出した親準備性の世代間比較より，新たな親準備性概念を捉え直すことを目的とする。

方法

研究期間

2011年6月～10月（毎月第3土曜日，全4回）

調査実施場所

広島県東部における異世代交流型子育て支援に基づいた、広島県福山駅近郊の福山大学社会連携研究推進センター子育てステーションにて行われる「子育て Learn&Talk」

調査対象者

「子育て Learn&Talk」の参加者 173 名（女性 120 名，男性 53 名）。

調査実施プログラム概要

地方自治体，学校，各種機関・団体，地域産業等との連携により，地域の活性化に資する実用性の高い萌芽的研究の推進を目的とした施設で，「健全なところとからだに支えられたまちづくり」をテーマに運営している。子育てステーションは，現代の子育て家庭のニーズを十分に満たしている場であるといえる。

質問紙の内容

プログラム終了後，参加者に自由記述形式の質問紙に回答してもらった。質問紙の内容は，「親になること」について問う ①子どもへの関わり方・接し方 ②一人の人間として ③パートナーや家族との関係 ④地域・社会とのつながり ⑤仕事と家庭のバランス の5項目と，異世代交流の感想について質問した。

結果

回答結果を SPSS Text Analysis for Survey4.0 を用いて，感性分析をした。まず，肯定的・否定的のタイプ別にキーワードを抽出した後，手作業でカテゴリを作成し，各カテゴリの結びつきや関係をサークルレイアウトにまとめた。

「親になること」についての各項目の回答結果

①子どもへの関わり方・接し方(図 1) 最も多かった意見は，関心・理解を持って接するというものであった。そして，関心・理解に愛情が内在しており，そうしたスキンシップをとることが大切であると読み取れる。また，スキンシップには舐めも含まれており，子に舐めをするうでは，親自身の成長や自律的な態度も必要であるというつながりも見られた。世代間で特に差が見られたのは，「子どもと目線を合わせる」という意見であった。得られた 14 回答のうち大学生は最も多く(57%)，60 代以降になると 0%であった。また，「時間をかける」という意見に関しては，7 回答のうち 60 代以降からの回答が最も多く(57%)，大学生や 20 代からの回答は 14%であった。

②一人の人間として(図 2) 子どもへのモデルとなるような，「責任・自律・誠実さ」が必要であるという声がどの世代からも比較的多く聞かれた。モデルの提示の必要性は，子どもに「優しさ」や「厳しさ」の

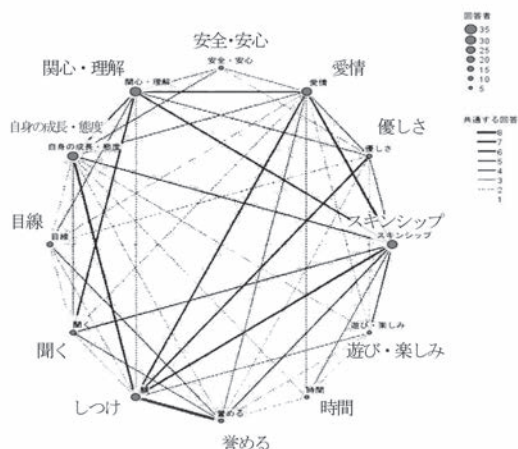


図1 「子どもへの関わり方・接し方」カテゴリ間の結びつき

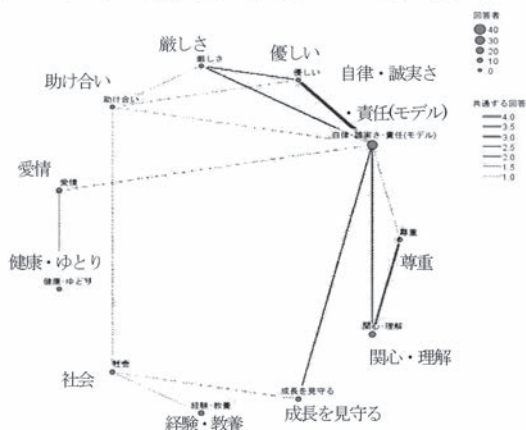


図2 「一人の人間として」カテゴリ間の結びつき

ある対応をするため、「成長を見守る」ためであるというつながりも見られた。また、子どもと向き合う際に、自分も子どもも一人の人間として考え、子どもへの「関心・理解」や「尊重」することを重んじるという声も多かった。世代間による差が見られたのは、「健康・ゆとり」についての回答である。60代以降からは得られなかったが、それより若い世代からは偏りなく回答が得られた。

③パートナーや家族との関係(図3) 「笑顔で仲良く」や「話し合う」という、コミュニケーションについて、またその内容やかたちについての「必要性・大切さ」が目立って多かった。それらに次いで、

「協力」「支え合い」という意見があり、それらを通して「思いやり」や「尊重」することへのつながりが示唆された。世代間による差が見られた回答は、「話し合う」、「信頼」、「理解」においてであり、60代以降では見られなかった。また、60代以降の世代で最も多く聞かれた意見は「尊重・思いやり」で、14回答中28%であった。そして、この意見については大学生も同様に多かった(42%)。

④地域・社会とのつながり(図4) 「地域」のキーワードから「子を育てる」への結びつきが、そこまで強くないものの、見られた。回答からは、地域の方々と触れ合うことで、「挨拶」や思いやり、「公共ルール」を身につけて子どもは成長していく、という意見がよく見られた。また、現在は地域規模での行事や子どもが地域に関われる機会が少ないという現状への声も聞かれ、積極的な参加が望ましいという希望もあるようだった。そして、若干ではあるものの、地域で異世代(特に祖父母世代)と関わる機会を持つことが出来れば、新たな教えや考えかたの発見や「伝承」になって良いという声も聞かれた。伝承を望む現在子育てをしている世代や20代、大学生と同様の比率(33%)で、祖父母世代からも、若い世代へ恩送りの精神で伝承を望む意見もあった。

⑤仕事と家庭のバランス(図5) 全回答中の32%に「仕事」というキーワードが含まれており、最も出現頻度の高かった。生活していくため、家庭を養うための仕事が優先されるという意見が多く、しか

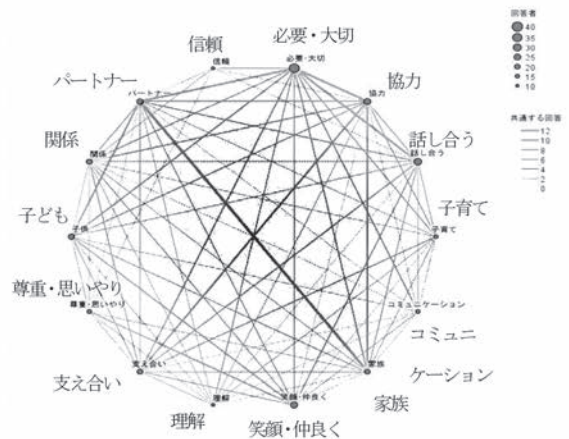


図3 「パートナーや家族との関係」カテゴリ間の結びつき

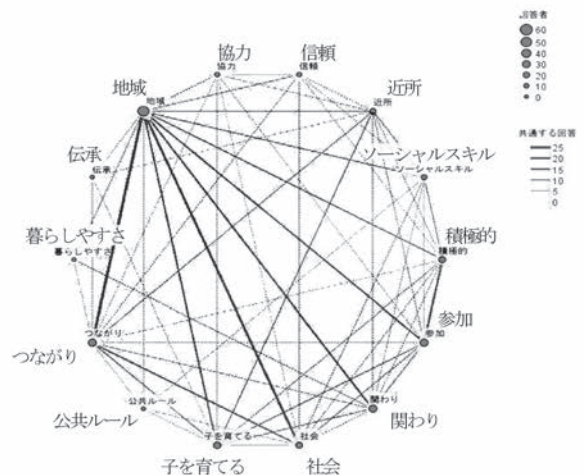


図4 「地域・社会とのつながり」カテゴリ間の結びつき

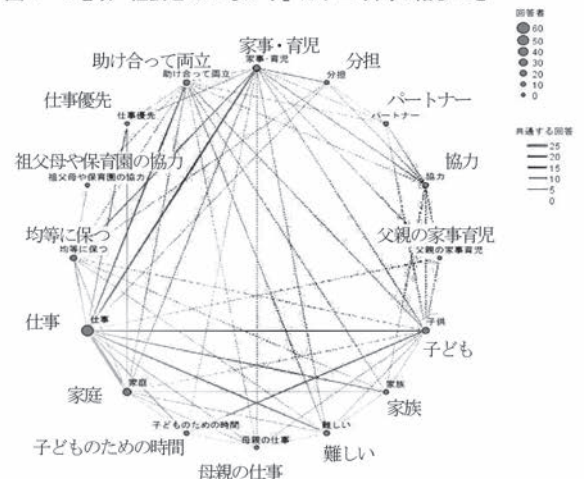


図5 「仕事と家庭のバランス」カテゴリ間の結びつき

し、仕事をするためにも、心の拠り所としての「家庭」が必要であるという意見も次いで多く見られた。そして、バランスは均等に保つことが望ましいと言われつつも、両立は難しいという意見が全世代を通して見られた。また、大学生に多く見られた意見で、子どものための時間の確保、子どものことを考えたバランスを保つべきだという声が目立った(52%)。「父親の家事育児」のカテゴリに関しては大学生と40~50代のみの回答で構成された。「母親の仕事」のカテゴリに関しては30代以降の全ての世代から回答が含まれていた。

「異世代交流の感想」についての回答結果(図6)

最も多く見られた感想は、世代や時代の違いについてであった。そして、「世代の違い」と「時代の違い」の両カ

テゴリから、「異世代との輪」や「祖父母世代から学ぶことができた」や「若い世代への関心」カテゴリへのつながりが見られた。また、世代の違いを感じつつも、「共感」を覚えた場面も少なくなかったようである。しかし、関心や発見があり参考になったと、有益であったと思われる感想が全世代に共通して見られるにも関わらず、異世代交流を重要視する声が中高年世代や祖父母世代からは少なかった。少数ではあるが、同世代と悩みや苦労を共感し合うことで子育てへの不安や不満、疑問が解消されたという感想が祖父母世代(8%)からも若年世代(11%)からもあった。

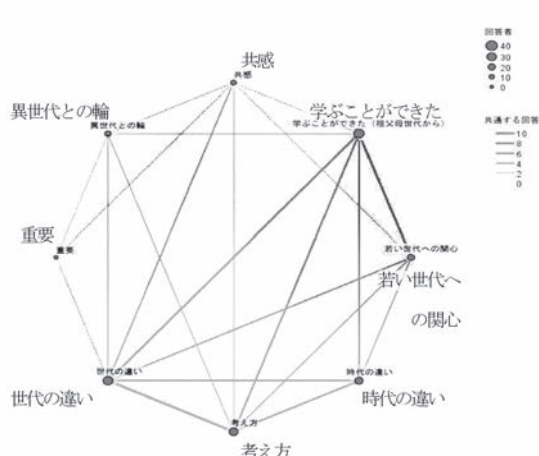


図6 「異世代交流の感想」カテゴリ間の結びつき

考察

親準備性とはこれまで、養育役割を主とした共同性を中心に捉えられてきた。本研究では、今日の深刻な子育て問題が絶えない次世代子育てにおいて、親になるうえで必要な心構え・意識とは何か、それは養育役割に留まったものではないと考え、様々な世代に「親になること」について意見を出してもらい、子育ての現状から次世代子育てに向けて形成すべきレディネスを明らかにした。

本研究をするうえで掲げた、次世代子育てにおける、これから子を持つ者の「親になるために備えるべきレディネス」と本研究の結果の相関について考察する。第一の「地域社会単位での子育て」について、社会で子は育ち、子を持つ・持たないに限らず、地域の子どもたちを育ててゆけるような地域の一員になるというレディネスの必要性は支持できただろう。第二の「性別の概念を越えた子育て」について、支持となる意見も少数ではないものの、未だ共通認識への余地があるだろう。第三の「子育て文化の伝承」は、その重要性は支持されながらも、現状の地域内コミュニケーションの希薄化が今後の課題となるだろう。

本研究から抽出することができた意見と、既存の親準備性とを比較する。既存の養育役割の重要性については主に、「子どもへの関わり方・接し方」、「パートナーや家族との関係」項目における、優しさやスキンシップ、パートナーや家族との信頼関係を築くことを重視するという声から十分にその必要性は再確認することができた。しかし同様に、子どもに接するうえでは、自身の自律性や成長が求められる、まさに、子へのモデルとなるような責任のある態度、誠実さが必要であるという意見も多かった。この自律性は、作動性と類似概念であり、従来男性に期待されてきたものである。此处に、子育てに性別によって分業された概念は要らず、それを越えた心構えで望むべきであることも明らかになったといえるだろう。

各世代の意見をまとめると、大学生~20代からは子どもや家庭、地域社会への関わり方について質を重視する声が

多かったのに対し、祖父母世代からは関わる時間や機会を持つという量的な意見が多かった。また、30~40代では家庭で、子を持つ親としてパートナーシップや女性の社会進出、男性の家事育児の促進を求める声が挙がった。この各世代による意見の違いについて、若年世代からの関わりの内容についての意見が多かったことは、近い将来これから子育てする、子を持つことになる立場であるからこそ、現在の子育て問題への関心、意識が高いからではないか。今日の社会における子育ての多様性を自覚しているからこそ、時間よりも内容について考える傾向にあるのではないだろうか。また、意見の傾向は今回のプログラムによって喚起されたものでもあると言える。プログラムでは子育てや親のあり方について各世代が話し合ったのだが、若年世代・親世代が祖父母世代の意見を聞くという構図のような場面もあり、それが子育ての内容について迫ったものであった。そして、講師を招き講演を受講するという形の回もあり、やはりそれも子育ての質的な側面へのものであった。

本研究を終えて、日々変わりゆく社会で、その将来を担ってゆく子どもたちへよりよい子育てやモデルを提供できる社会を築いてゆくことが、私たち若年世代の喫緊の課題であり、その自覚こそが最も大切な根底のレディネスと言えるだろう。また、この研究で明らかになった新たに親になる上で形成すべき大切なレディネスとは、これから親になる、ならないにかかわらず若い世代、現在子育てしている者、また、子育て経験者であってもこれから孫を持つような祖父母の世代に備えてもらいたい。すなわち親準備性とは、社会の構成を担う一人一人が、社会に生きる子ども一人一人に対して親となれるようなレディネスであり、誰しもに求められるものであるだろう。

引用文献

- 青野篤子・赤澤淳子・松並知子（2008）ジェンダーの心理学ハンドブック ナカニシヤ出版 発達, pp.3-94.
- Belsky, J. (1984). The determinants of parenting : A process model. *Child Development*, **55**, 83-96.
- Clinton, F. J. (1986). Expectant fathers at risk for couvade. *Nursing Research*, **35**, 290-295.
- 土肥伊都子（1995）. ジェンダーに関する役割評価. 自己概念とジェンダー・スキーマー母性・父性との因果分析を加えて— 社会心理学研究, **11**, 84-93.
- 花沢成一（1992）. 母性感情の発達 母性心理学 医学書院, pp.61-105.
- 林田りか・中淑子・草野美根子（2003）. 入学前の看護学生の子どもに対する接触および行為体験の実態 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, **3**, 85-91.
- 平田伸子（1999）. 親準備性への支援—リプロダクティブ・ヘルス/ライツの視点から— 九州大学医療技術短期大学紀要, **26**, 73-78.
- 福丸由佳（2000a）. 共働き世帯の夫婦における多重役割と抑うつ度の関連 家族心理学研究, **14**, 151-162.
- 福丸由佳（2003a）. 乳幼児を持つ父母における仕事と家庭の多重役割 風間書房
- 伊藤富美（1988）. 妻の役割の道具性と表出性に対する夫の評価 日本家政学会誌, **39**, 793-802.
- 岩治まどか（2009）. 大学生における養護性の検討 東京家政大学研究紀要, **49**, pp.133-142.
- 岩治まどか・井森澄江（2009）. 女子大学生における親準備性の発達（2）—入学時の養護性について— 東京家政大学研究紀要, **50**, pp.151-158.
- 柏木恵子（2010）. よくわかる家族心理学 子育て ミネルヴァ書房, pp.88-153.
- 数井みゆき（1996）. 子どもの発達と母子関係・夫婦関係 発達心理学研究 **7**, 31-40.
- 岡本祐子・古賀真紀子（2004）. 青年の「親準備性」概念の再検討とその発達に関する要因の分析 広島大学心理学研究, **4**, 159-172.
- 小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓（1998）. 父親になる意識の形成過程 発達心理学研究, **9**, 121-130.

- 大豆生田啓友・太田光洋・森上史郎（2011）．よくわかる子育て支援・家族援助論第2版 ミネルヴァ書房
- 大森彩子（2010）．母親の育児不安およびパーソナリティと有効な子育て支援の関連 日本女子大学人間社会研究科紀要, **16**, 173-188.
- 小此木啓吾．（1994）．マタニティ・ブルーの心理. 周産期医学, **24**, 189-193.
- Robinson, B. E. , & Barret, R. （1986）． *The developing father*. New York : The Guilford Press.
- Stickland, O. L. （1987）． The occurrence of symptoms in expectant fathers. *Nursing Reseach*, **36**, 184-186.
- 鈴木淳子（1994）． 平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成 心理学研究, **65**, 34-41.
- 山岸明子（1991）． 大学生の自己認知—「個としての自己」と「関係の中にある自己」の観点から— 順天堂医療短期大学紀要, **2**, pp.64-73.

Redefinition of readiness for parenthood towards the next generation : Through inter-generational comparison of readiness for parenthood

Sho Nakamura and Ayumi Tahara

The purpose of this study was to redefine the readiness for parenthood that has been primarily defined as nurturing role so far towards the next generation. 120 women and 53 men from university students generation to senior generation, who attended child-raising support programs provided by the university and nursery school cooperatively, were asked to answer freely about becoming a parent. Their overall responses were summarized in three groups: "grown up children in society," "parenting beyond gender-division," and "transmission of child-raising culture." Students pointed out more qualified commitment to the community and family, parents emphasized partnership in family, and grand parents noticed the expansion of time and opportunities of child-care. Nowadays, each generation has to develop readiness for parenthood towards the next generation because of the necessity of socialization of child-raising.

(指導教員：青野篤子)